私の大正・昭和史（戦前・戦中・戦後）

日本は今、少子・高齢社会となり、経済や社会の活力の低下、また家族の空洞化と地域コミュニティーの崩壊など厳しい状況にさらされています。そんな閉塞感漂う社会状況ではありますが、私たち高齢者は、こんなときだからこそ心を一つにして、私たちが乗り越えてきた辛い時代の経験を若い世代に語り継いでいくことが必要なのではないかと思います。子どもたちの明るい笑顔が未来永劫に続くことを願って…。

発行に際して

みらいふる鎌倉　会長　奴田不二夫

「私の大正・昭和史（戦前・戦中・戦後）」をテーマに投稿をお願いしたところ、短期日にも拘らず27編の投稿がいただけました。800字という制限がありましたため投稿下さいました皆様には、何時をどう纏めるかで大変御苦労をおかけしたことと思います。

時代の大きな変化、流れに翻弄されました波瀾万丈（はらんばんじょう）の生涯を短文に纏めていただくにはあまりにも酷なお願いであったと思っております。でも、それでもなお、投稿して下さいました皆様には只々感謝あるのみでございます。

投稿者と同世代の方には越えてきたあの日、あの時を、若い世代の方には「そうだったのだ」と感じていただくことができましたなら、今回掲載の18編の意義は並々ならぬものがあると信じています。

今の「平和」に感謝しながらお読みいただけたらうれしい限りでございます。

紙面の都合上、27編より18編を今回掲載させていただきました。

御投稿にご協力下さいました皆様、そして編集に携って下さった沖田委員長、教養部の門田京蔵部長、原田光さん、勢年部の羽鳥光男部長、内田一男さん、鈴木義雄さん、ありがとうございました。

65年ぶり慰霊の参拝

～多くの戦友の冥福を祈る～

笛田よしたけ会　元会長　郷原　重雄

私は、昭和17年度現役の陸軍飛行兵として滋賀県の第八航空教育隊に入隊。九九式軍偵察機の整備兵としての半年の教育を受け、直ちに比島マニラに戦闘を展開している第十三飛行場中隊に転属を命ぜられた。現地でさらに厳しい補充教育を2カ月受けた後、作戦部隊の一員となり以後終戦まで、約2年間ルソン島を中心に各飛行場で作戦任務を遂行した。

フィリピンは日本内地の最後の防衛地点として、特に19年秋頃より激しい防衛戦となり、53万の兵士の尊い命を失う結末となった。わが部隊も全滅に等しい悲しい結末となった。私は幸いにも、20年5月より飛行第四師団長の三上喜三中将閣下と行動を共にせよとの命により、無事22年に帰国することができた。

帰国後、別れた多くの戦友の慰霊参拝をと思いながら、60年余年が過ぎてしまいました。幸い昨年2月、機会を得て慰霊一人旅（甥同行）で訪比することができました。戦没者に対し生存者のひとりとして、責任の一端を果たし若干気持ちが楽になりました。

モンテンルパで戦犯として処刑された多くの将兵にご冥福をお祈りし、平和を誓う

中部ルソンの激戦地に建立された平和観音前で、60余年ぶりに戦友に語りかけ供花を手向ける

神風特攻隊の第1号発進基地として、クラークの近くの飛行場跡地で、レイテに飛び立った元気な勇姿を偲び、感無量であった

マニラ湾の落日。マニラ市内からコレヒドール島やバタアーン半島の美しい夕陽を眺め、明日の戦友との別れを惜しむ

私と海軍時代の思い出
ー五省

西鎌倉福寿会　上野　三郎

丹波篠山に生まれた私は、近くに歩兵聯隊があった関係上、軍人の世界は身近だった。

青山藩の藩校の流れを汲む鳳鳴中学校に入学すると「勤倹尚武」「質実剛健」の校是のもと軍人志望の思いがますます強くなり、昭和15年海軍兵学校に入学した。

昭和18年秋に卒業するまでの3年間厳しい教育を受けたが、その間、脳裏に叩き込まれたものとして五省がある。これは自習終わりの5分間、各自机に向かい姿勢を正し眼を閉じ、一項目ごとに題目を唱え、その日の自分の行動を反省するもので、次の5項目だ。

一、至誠に悖るなかりしか
二、言行に恥ずるなかりしか
三、気力に欠くるなかりしか
四、努力に憾みなかりしか
五、不精にわたるなかりしか

人間形成の大事な時期に、このような観点にたって反省を積み重ねた事は、意義深いものがあったと信じている。

海軍兵学校時代

兵学校を卒業し士官候補生として戦艦伊勢の乗艦実習を終え、巡洋艦鬼怒に乗り組みシンガポールを基地に半年ばかり勤務後、内地にて航空母艦、駆逐艦に乗艦したが、戦局がいよいよ厳しくなり昭和20年7月に特攻隊回天（人間魚雷）に配属され、徳山の大津島で終戦を迎え、思いもよらぬ終戦で虚無感を味わった（同期の半数が戦死したのは痛恨の極み）。

回天の頭部（炸薬が1トン装入）

回天の全容（長さ25米・搭乗員は真中の出入口より入る・潜望鏡にて外部を偵察）

やがて外地からの復員輸送が始まり、戦時中戦闘らしい戦闘に加わらなかった負い目もあり、せめてもの償いにと、これに従事した。この時艦に復員者を迎えると涙を流さんばかりに喜ばれ、本当によかったと実感、これで最後のご奉公もできたと思った。復員輸送も終わり、海の生活には縁をきり、工学の道を選び、ベアリング作り一筋の40年余りであった。

出撃前の指揮官よりの訓示

潜水艦に搭載されての出撃

現役を引退する頃より海軍旧友との会合も多くなったが、かつての塩気も抜け、話題も海軍時代の思い出から健康談義が中心となり、五省も次のような今様五省と変わってきた。

一、姿勢に曲がりなかりしか
二、言語にもつれなかりしか
三、歩行に憾みなかりしか
四、栄養に欠くるなかりしか
五、頑固に亘るなかりしか

米寿も視野に入る年代になったが、五省を念頭に置き、今様五省にも心し、余生を健康で有意義にと思う今日この頃である。

大東亜戦争に思う

長谷上町甘縄会　原　俊子

昭和16年12月8日、雑巾掛けをすると、傍らから白く氷るような寒い朝だった。

父がラジオのニュースを聞き、日本は大変な事になった、大国相手の開戦の話を聞いた。小学校3年生だった子どもには良く分からなかったが、ラジオはいつも勝利のニュースしか流さなかった。段々と村の青年は皆招集され、我が家の兄3人にも赤紙が来た。小学生の私たちは、その都度、村の神社で出征兵士の式に参加した。日ノ丸の旗を振り、「勝ってくるぞと勇ましく」の軍歌を歌い、バスの停留所で見送った。我が家の3人目の兄が出征の時、私と妹は、木炭バスの後を追いかけ、バスが見えなくなるまで走った事を忘れない。家に戻ると、気丈だった母が床にふせていた。長兄は川崎の溝の口の連隊にいた。南方に行く前に、最後の面会の通知が来た。母は、内緒で兄に、好物のお団子を帯の中に入れ、持っていったのを覚えている。ひとときの兄との語らい、別れを惜しみ、皆家族が振り返り、振り返り、門を出るのに、母は自分に言い聞かせるように、兄はきっと元気で帰って来るから、振り返るではないと言って別れた。その後、何の音信もなく、どこにいるのか分からなかった兄から、ビルマより1枚の葉書が届いた。マンゴーなど、おいしい果物を食べさせてあげたいと、良い事のみしか書いてなかった。その後、戦争は敗退の一途をたどり、母は5時に起きて千葉の成田山のお百度参り、好きなお茶断ちをして、兄の無事を祈った。私も妹も、村の神社に夜の明けぬうちに行き、お百度参りをさせられ恐かった事が忘れられない。

私が女学校1年の時日本は敗戦、神風は吹かなかった。戦死の公報は入らなかったが、父は諦めていたらしい。しかし戦後2年経って、何の連絡もなく、兄は突然帰って来た。塩と乾パンと「キニーネ」という、マラリアの薬を持って。母に似て、小柄な兄がよく元気で、母の祈りが届いたのだろうか。インパール作戦で生還した兄は、多くを語らなかった。その後も、マラリアの高熱に苦しんだ兄だったが、甥夫婦と成人した孫に看取られ87歳で、父母の許に旅立った。残された私たちも「欲しがりません勝つまでは」の戦中戦後、飢餓のきびしい時代を過ごした。

貧しさを知らない孫から、「おばあちゃんの1番好きなものは」と問われ、「白い御飯のおにぎり」と答える私。いぶかしげに聞く孫たちに、このようなきびしい時代があったこと、そして今この豊かな平和な時代が、悲しい、多くの方の、犠牲の上にある事を、語り伝えていかなければならない責任があると思う。

68年前の開戦の日を目前に、忘れる事ができない思い出である。

※百度参り　社寺に参り、その境内の一定の距離を百回往復し、その度に拝すること。（広辞苑）

私の戦中・戦後

西鎌倉山親寿会　那須　潔

昭和14年9月から熊本にある父の実家に預けられ、伯父のスパルタ教育を受けました。早朝起床、裸のランニング、乾布まさつ、庭の掃除、次いで教育勅語と124代天皇名の奉唱を、四季を通じて晴雨に関係なく実行し続けました。この日本の隆盛を信じて疑いない軍国少年の生活は終戦の日まで続いたのです。先日、北朝鮮の小学生の映像がテレビ放映されましたが、外来者に向かって立ち上がり、お辞儀をして敬意を表するさまは、まさしく当時の我々小学生の姿でありました。統制教育の姿です。

20年8月15日、終戦日到来。中学1年生は農村の山林でガソリンに替わる松根油の貯蔵用塹壕掘りに従事していましたが、正午過ぎ、小学校校長から敗戦を告げられ、女学生は号泣、中学生は「そんなはずはない」と胸中の不安を懸命に打ち消しながらの帰宅となったのです。翌日からの新聞は、すべて「勝てるはずがなかった」と昨日までの論調を180度転回させたご宣託で満杯となり、我々子どもの目にも甚だ奇異に映りました。民主主義、自由主義の奔流にも似た流れ込みへの対応は、民主、自由への経験に乏しい教師に頼ることもできず、もっぱら評論家の書き物に頼りましたが、今にして思えばその義務と責任についての解説、論評は乏しく、もっぱら権利の主張を前面に押し出したものが多かったように思います。これが昨今問題となっている「責任なき口舌の徒」を生み出すことになっているのではないでしょうか？

21年夏、父が満州から帰ってきましたが、これは大きな喜びでした。なにせ安否が皆目分からなかったのですから。一方、食の窮乏は戦後の方がさらにひどいものとなり、常時空腹。コーリャンの粥に岩塩をまぶして食し、食後水をたらふく飲んで腹を膨らます日常でしたが、父がある日往診の帰りに道端に落ちた大根を見つけ、自転車から降りて「これを持ち帰るか否か」を暫時迷ったという話は忘れられません。（かくしてマルクス論を目にし、「こちらの方が人間生活に適わしい？」と思い惑う20代へと突入していくのです）

兄の思い出

離山ちとせ会　三谷　サワ

先日、横須賀芸術劇場にコンサートを見に行ってきました。本当に何十年ぶりの横須賀でしたが、街の様子はだいぶ変わっておりました。芸術劇場は、昔の海軍集会所の跡に建てられたようで、遠い昔、兄に面会に来た所なんだと思うと、感慨ひとしおでした。

私は大正11年生まれの88歳です。埼玉菖蒲町の片田舎で、兄は中学校を出て、埼玉師範を卒業後、小学校の先生になりました。母が軍隊に出したくなかったからです。でも、状況が変わり、師範学生も徴兵検査を受けることになって、兄も小学校で二年間教師を勤めた後、横須賀海兵団に入隊しました。

戦況は日増しに厳しくなり、最初は戦艦「陸奥」に乗り、すぐに駆逐艦「雷」に変わりました。「雷」は南方で戦う兵隊さんたちの食料を運ぶ船の護衛艦でしたので、危ない危ないと思いながら任を果たしていたそうです。そして、横須賀港に帰ると面会を許されるのです。そんな時、兄から電話があるのですが、母は病弱で一度も会いに行けませんでした。私は、兄の好物のぼた餅を作って、妹たちを連れて横須賀の集会所へ何回往復したことでしょう。それに、手紙も毎日書きました。面会のたびに兄は「俺は幸せ者だよ。こうして面会には来てくれるし、郵便はいつも山のように届くしね」と言って、涙ぐんでおりました。中には手紙の来ない人もいて、かわいそうで仕方がないと、また涙でした。

その兄の戦死の公報が、昭和19年4月13日、ついに来てしまいました。骨箱には、たった一枚の写真があるだけでした。母は覚悟ができていたのか、割合しっかりしていて驚きました。今、この日を命日としています。

こんな片田舎でもB29が時々頭上を通る気配がしました。そして、ついにあの終戦の日が……。ラジオの放送を聞いて、勤務先の局長さんは「負けたんだ。日本は戦争に負けたんだ！」と涙ながらに告げました。皆「えっ」と驚き、あとは涙、涙でした。

あれからもう65年、兄は戦争で死ななければ90に近い年齢です。生きていれば、どんな人生を送ったかと思うと、残念でなりません。

「コックリさん」が流行った

大町黄金会　中井　滋

戦時中「コックリさん」が流行りました。戦地に赴く親兄弟の無事を祈って秘かに、残された家族や友人の間で行われたようです。

戦争末期、昭和19年から米軍の本土爆撃が厳しくなり都市部の国民学校学童40万人が戦渦を逃れ集団疎開が行われました。私も2年生の12月になって東京の自由ヶ丘から長野と山梨の県境にある長坂の駅前旅館に着きました。今の北杜市で、当時はジャガイモと蒟蒻（こんにゃく）しか収穫できない寒村でした。窓から見える雪に覆われた南アルプス甲斐駒ケ岳が目前に迫る姿は、都会を遮断するようでした。

毎日1キロの道のりを上級生に従い集団登校をしました。疎開児は地元の児童と馴染むこともなく、食糧難で体力不足から喧嘩する元気もなく部屋の中に閉じこもっていました。家族から離れた寂しさと不安の中で、「コックリさん」に興じたのです。疎開地は児童にとって戦渦を逃れた平和な場所ではなかったのです。

昭和20年3月10日の東京大空襲から不幸な知らせが次々と寄せられ、同年5月25日西部地区空襲で実家のある自由ヶ丘が被災したのです。疎開児の5年生と3年生の兄妹の両親が焼死し孤児となったのです。この知らせは子どもたちに衝撃を与え、不安を遮ろうと「コックリさん」は続けられました。終戦の知らせが伝えられた日、毎日窓から眺めていた南アルプス甲斐駒ケ岳が8月の夏空に白い雲からくっきりと聳（そび）え立つ姿が今でも目に焼きついています。

戦争という重苦しい思いから、二度とこの地を訪れまいと誓っていましたが、現在八ヶ岳の近くに山小屋をつくり訪れる度に南アルプス駒ヶ岳の雄姿に魅せられています。長野県は満州への開拓農民の一番多く動員された県です。また、集団疎開児も多く送られた県です。今は当時と違い、開拓農民は高原野菜の出荷で潤い、私が戦時中お世話になった北杜市は随所に温泉施設があり、明るく活気に満ちた豊かな魅力ある所となっています。

※こっくり

（「孤狗狸」と当て字）

占法の1つ。ひもでしばり交差させた3本の竹で盆を支えて3人で軽く盆を押え、1人が祈祷・伺いなどをし、盆がひとりでに動き出した時、霊が憑いたとし、その動きで物事を占う。遊びとして行われ、盆の代りに文字盤を用いることもある。（広辞苑）

私の昭和史（戦中）

西鎌倉山親寿会　富永　正夫

私は平和で戦争のない日本で毎日のんびりと暮らしております。しかし、これは第二次世界大戦で戦死した300万人の犠牲のお蔭です。それを片時も忘れてはいけないと思っています。それを思うといつも涙が止まりません。

私も最後の現役兵として中国大陸に送られ、敵状の悪い警備中隊（山西省紛西県域）に配備され、冬の3カ月間毎晩「往復ビンタ」を受け、零下30度の夜の歩哨や不寝番につくなど、地獄の軍隊生活でした。あまりにも過酷な勤務なのでノイローゼで死者が出るほどでした。食事は高粱めし、たくわん、塩の汁一杯で、栄養はゼロに等しい悪い状態でした。これらの影響で「耳」「歯」「目」に今日まで支障があり、今でも苦労しています。

いよいよ戦況が悪化し、転進の命令が出て南方進出部隊の補充隊として山東省33大隊に転属し、また鉄道警備についた。その間、近辺の警備強化のため討伐隊を編成し、敵（共産党八路軍）の掃討を行った。ゲリラ戦で多数の戦友を失った。仲の良い工藤兵長、玉川曹長の二人も戦死した。

ある日、隊長に呼ばれ43軍の司令部に転出の命を受け、直ちに済南軍司令部に出頭し特殊部隊に配属され、その指揮下に入った。済南の周辺は八路軍の動きが激しく、何か変な空気となってきた。8月15日、日本が敗れたとの情報により特殊部隊は友軍救出のためトラックに分乗し出動した。部隊（約千名）が八路軍により武装解除され完全に捕虜となっていた。なんとしてもこれを救出するための作戦をたて、激戦の後全員救出に成功し、済南に行くことになったが、その中には旅団長、部隊長等もいた。兵隊は皆非常に喜んでくれ感謝された。ところが鉄道が破壊され乗船港青島に辿り着くのが難しくなった。

鉄道が使用不可能になるのを極力防ぐため駅の警備を強化し毎晩のように出動した。やっと復員の話が決まり、司令部・軍属・病院・寄留民・航空隊と一緒に、彼らを護衛しながら線路に沿って南下し、徒歩と乗車を繰り返し、やっと青島に着いた。鉄道沿線の各駅は破壊され、寝る場所がなく、住民の襲撃を受けたりしながら、子どもも兵隊も歩きつづけて、やっとの青島到着！との感が強い。4月25日、厳しい中国軍の検査を受け、米国のLST船に乗船できた。

復員列車に乗り、広島を目にし東京に着いたが、我が家は焼失、いろいろ訪ねてやっと家族に逢えた。嬉しかったが、戦後の内地も食糧がなく、買い出しの毎日であった。

振り返って思うと、本当に馬鹿馬鹿しい戦争だったとの思いが強い。この戦争で命を失った方々には本当に心からすまない気持ちでいっぱいです。

昭和18年秋
（上段右から）都筑健一、松岡　孝、東郷　譲
（下段右から）片岡　魏、後藤俊太郎

硝煙の青春

雪ノ下寿会　都筑　健一

私の青春は戦争と平和への流れのなかにありました。早朝の鶴岡八幡宮へ出陣学徒一同が参詣し、宮司から激励のご挨拶をいただいた時は、声涙共に下る感動に包まれて武運長久の祈願に、青年学徒の興奮した面持はそのまま神宮外苑の秋雨けぶる中を閲兵分列行進の名画面として今に残されています。

私は北支部隊要員として山東省済南周辺の演習地で朔北を吹きまくる風塵をあびて初年兵教育と、過酷な猛訓練終了後は幹部候補生教育を受け、さらに将校教育の苛烈さに身をさらして任官しました。終戦時には北支部隊は北朝鮮に在り、そのままシベリアに送られ、寒冷季節に向かう沿海州のマンゾフカ収容所に入り、軍の組織は破棄され俘虜収容所（ラーゲル）で強制労働に服し、しばらくは一般兵と起居をともにしましたが程なく将校収容所へ入居しました。

シベリア沿海州で対面は日本海、凍土零下30度～40度。吐く息が凍る、鼻、マツゲが白くなる。軍手二重の上に毛皮の手套着用、毛皮の防寒靴を通して足先が凍傷になった。雪は風力にあおられて横から殴られるようで立っていられない。関東軍、北支軍、衣部隊約60万が抑留され、寒冷、空腹、重労働で餓死者約4万から5万人と推定される。当時の厚生省援護局などの公式発表、私も一部を保管中。舞鶴復員第1号は21年12月10日付。

心身ともに鍛え上げられましたが、人生100年時代を迎えたこの頃は楽しく生き抜くための心構えを作りたい。只今は青春を思い起こして、地域のため所属組織の一員として、人生フィナーレの自己研鑽に努め身辺の整理に励んでいます。紙数が及ばず機会があったら再びと思います。

家業の浮き沈みを経て

みらいふる鎌倉　副会長　伊藤　武子

材木座の光明寺門前に代々350年前から住みつづけ、手広く青果業を営んでいた「八百利（やおり）」。満州事変が起こった昭和6年に、私は「八百利」の末娘として生まれた。

戦前は大勢の家族がいて、15人分5升ものご飯を炊いた。その頃の鎌倉は別荘地として栄えていて、立派な邸を構えた名家のお得意さまが多く、親しい触れ合いからいろいろなことを学び、糧とした楽しい日々であった。

ところが敗戦を迎え、鎌倉の世相もがらっと変わる。たった1人の後継ぎの兄が出征したまま還らぬ人となり、一家の暮らしにも影がさしはじめた。大寒の真夜中、母と五所神社に百粒の小豆を握りしめ、お百度参りしたことも空しく、昭和36年、兄の戦死の通知が届く。

亡き兄の代わりにと、私はいっそう家業に打ち込み、場所柄を活かして「海の家」や民宿も経営した。その民宿には作詞家・吉岡治も滞在し、美空ひばりのヒット曲「真赤な太陽」はここで生まれたという。

しかし時勢の流れには逆らえず、38歳のとき、茅ヶ崎の病院に勤めに出ることになり、2年後の昭和47年には「八百利」をたたんだ。天寿を全うした両親を看取ったときには、還暦近くになっていた。

そして今から10年ほど前、庭続きに住み、材木座の老人会「海楽会」の会長をしていた姉の石渡喜代子さんに誘われ入会したことが、今日につながった。以来、鎌倉に生まれ育った1人として、住みよく、あたたかみのある街にしたいと、自分ができることを続けている。

4月からは自宅を開放して、若いお母さんたちのサロンも開く。「今こそ、ばあちゃんの知恵袋をあけるとき」と思う。

生きがいは「とぼしきままに人集め、酒飲め　物を食えといふ時」と、歌人・橘曙覧（たちばなのあけみ）の歌に共感します。

八幡宮付近の思い出

雪ノ下寿会　伊藤　静枝

鶴岡八幡宮前で育った私として、今年の一大事は1000年の歴史を持つ大銀杏が力尽き倒れたことでした。景色が全然違ってきました。

70年以上前の記憶に戻りますと、子どもたちのかくれんぼの場所。銀杏の葉っぱを集め押し花に、学校の写生は赤いお宮と黄色の銀杏セットが定番です。太鼓橋は子どもの遊び場、かっこ良いポーズをとり滑ります。お参りの人に手を叩かれ得意気。欄干のところで椎、蓮、菱の実をラッコみたいに石でたたき口に入れておやつ。池のザリガニ、えび、フナ、カメを網で取っていると、神官さんに見つかり「コラー」。パッと逃げる。

お祭りはとても楽しい年中行事のひとつ。ござを敷き、5銭10銭屋さんがぎっしり。夜にはカーバイトの匂いプンプン。おじさんたちが「何でも買いな～チョイチョイ買いな～」と声高に怒鳴っているのをよそに、飴玉、ハッカ、おもちゃ、子どもたちはじーっと見つめ、手に持っているお金と思考する姿が目に浮かびます。

横小路は車なんか通らず子どもたちは綱とび、石けり、羽根つき、通路いっぱい使いました。たま～に人力車、遊覧馬車が通り、ときには湯気が立っているご馳走を落としていきます。

戦後は輪タクでした。戦中は出征兵士を送るのに八幡宮に参って駅に行くコースでした。段葛（だんかずら）を旗振って兵士を先頭に「天に代わりて」と声高に歌いながら家族その他の人で行進する風景が毎日のようでした。鳥居の前では、千人針をお願いする割烹着姿のご婦人が目立ちました。

戦後の翌年頃から若者が集まり、野球、演劇、音楽と、八幡様協力のもと現幼稚園元休憩所で、松竹の俳優さんの指導のもと雪ノ下演劇研究会なるものを作りました。自分たちで芝居小屋造り、銀杏の木の下で、芝居、音楽と。人と人で山盛り、舞殿に上がり木の枝に登ったりで一大イベントでした。何もない時代ですから…5年ほどやりましたかね…。そのうち鎌倉カーニバルができ、我々素人の出る幕ではなくりました。

思えばその当時、若者は熱かったですね。八幡宮周辺の庶民の昭和史の一端です。

大正15年生まれ

離山ちとせ会

伊藤　仁

私たち旧制中学校の卒業は5年生の12月でした。4年生は3月卒業なので、同期となりました。昭和19年4月（1944年）、進学校は全寮制で、初めの2カ月は通常の学習でしたが、その後は勤労動員の連続でした。農家に宿泊して田畑の作業が、夏・秋・春と続き、時々学校に帰りました。

真夏には綾瀬飛行場の滑走路整備と運搬作業、小学校の講堂に蚊帳を並べての合宿でした。若者としての食事は十分とっていました。

昭和20年当初より川崎の鋳造工場での仕事は航空機の部分作業、近い者は通勤でも良し、会社の寮がほとんどで、私は蒲田の叔父の家から通いました。

大正15年生まれは、満19歳で「徴兵検査」を受けた最後の年齢です。甲種合格でした。

3月10日深夜より東京大空襲があり、叔母たちは池上の本門寺まで逃げ、私と叔父は家を守るべく残っていましたが、火災がすごくなり、防空壕に入ったりして逃げ惑ったところは広い川でした。明るくなって見ると、向かいは羽田飛行場でした。もといた家あたり蒲田は焼け野原。同僚の消息をと思い六郷の鉄橋伝いに川崎に入ると、ここは一部焼け野原でありましたが、全員脱出したことが後で分かりました。六郷を渡る時、帰りも死体を見ながら夢中で渡った記憶がよみがえってきます。

次の動員は藤沢螺子工場。5月29日、横浜大空襲があり、同級生の実家が焼けるのを会社の寮から叫んでいる光景がありました。

この頃から軍隊への召集が始まり、私は20年6月、横須賀の永井海兵団に入団。もう艦が少ないので、市民のための防空壕掘りやたこつぼ訓練などの毎日で、夜中に辻堂まで強行軍が何回もありました。

20年8月15日は横須賀鎮守府へ転属の日でした。配属の分隊では、実弾でグラマン戦闘機に向かっていて、強攻な海軍の「撃ち方止め」は8月22日でした。私はそこで初めて終戦を知った次第です。

学年の半数がまだ除隊していないので、9月末学校が再開しました。自由登校となり一年半楽しい学校生活を送りました。

今生の別れを惜しむ母

山崎第二あかね会

馬見塚　安昭

私は昭和19年9月1日に「甲種海軍飛行予科練習生」として、鹿児島航海隊に入隊し11月1日から福岡県の糸島にある小富士航空隊に移動した。

父は支那事変(日中戦争)に出征したままであり、二人の兄もすでに軍隊に入った。残された家族は母と弟妹だけになった。

戦況の厳しさもあり、母は人知れず夫や3人の子どもと再びこの世では会えないものと覚悟しているようであった。それでも、せめて一目会いたい一心からか私の所まで面会に来たのだ。

当時は軍用列車が優先され、一般の汽車は遠距離、近距離を問わずダイヤが少なかった。そのため切符の販売数が少ないので発売の数時間前から並んで手にする有り様だったらしい。航空隊まで9時間かかったから、朝早く出ても夕方の到着になる。そんな大変な苦労をして来ても、刑務所同様決められた時間、面会室で会話するだけだし、私のその日の日課次第で面会できないこともあり得るという、誠にはかない面会である。

母は旅館に一泊して帰るのだが、当時の旅館は米を持参しないとご飯は出してもらえなかった。

私たちは日々厳しくつらい軍隊生活であったが、2週間ごとの日曜日に約7時間の楽しい外出が許された。外出して街へ出かけても飲食店などは閉店しているので散策しかない。そのため、軍の方で数十軒の農家に依頼してクラブが設けてあり、一つのクラブに10人ほどがお世話になっていた。ここでトランプなどをして終日過ごすこともできるし昼食ももらえた。

私の手紙をたよりに、母はこのクラブに来るようになった。クラブだと食料品も持ってこれるので張り合いがあったようで、私が転勤するまでの約5カ月間に2、3回も来てくれた。

予科練入隊当時（昭和19年9月）

海軍飛行兵長時代
17歳の美少年でありました
（昭和20年3月）

私の昭和史

笛田東芝珀桜会　原田　光

大正15年生まれの私の人生は、いつも昭和と同い年である。波瀾の昭和の歴史の中にそのまま私の人生が投影されている。東京二子玉川で生まれ、幼少の頃から野原の多い練馬区江古田の町で育った。その上、板橋第三小学校で新任の郷野三郎先生の情熱溢れる薫陶を6年間受けたことは、生涯の思い出であり、心の宝となっている。まさに恩師である。

昭和16年12月8日に勃発した大東亜戦争は、ミッドウェー海戦の敗北から一気に崩壊していったのである。

その間、昭和19年秋、日本人として日本の歌舞伎芸術を一度も観ずして死ぬのはと、無理して小遣いを貯め、明治座の一等席で観た先代中村吉衛門の「石切梶原」の思い出は、忘れることができない。

あの昭和20年3月10日未明の東京大空襲は、2000トンの焼夷弾により東京市街地の50パーセントを焼失。罹災者100万人・死者8万4千人・負傷者4万人という大被害であった。私の町は、その落とし残しの焼夷弾投下によるまばらな火災で、幸い我が家は無事であったので近所の家の消火に活躍した。それでも低空から投下され、1メートル間隔で落下された焼夷弾の直撃を一瞬の差で免れた。

実は、その日が私の徴兵検査の日であったので、早朝、池袋駅から見えた下町の空は真っ赤っかであった。そのとき、妻の慶子は、隅田川の橋の袂の舟の上で死線をさまよっていたことを、後年知るのである。

愛国青年として育った私は、我々が死んででも祖国を守るという気持ちで、20年5月10日に赤紙で出征。町の皆さんに浅間神社まで見送られて、岡山の中部114部隊に入隊したが、すぐに広島に移動。あの大田川の中洲の兵舎で毎日鍛えられた。毎朝その釣り橋を渡って川沿いを走る時、すれ違う広島の勤労女性が陽光に映えて一段とみな美しく見えた。その7月上旬の早朝に突然出動命令。極秘に、どこの戦地かと思ったら船は四国へ。高知県後免（ごめん）の山中に移動。戦闘部隊として山裾に壕を掘り、野営となった。部隊は連日、戦車などの大きな壕を掘るなか、私は暗号手であったので、その頃の沖縄戦の敗戦の様子は、刻々、極秘通信で送られてきて知っていた。

8月6日午前8時15分、原子爆弾が広島市に投下された。つい3週間前まで訓練していたあの広場がその中心地。市の人口35万人のうち14万人が死亡し、街は壊滅し遂に終戦。それからの1カ月。雨の多い高知の後免の山中で過ごした。雨に濡れた毛布にくるまり、月を眺めながら「国敗れて山河あり」の毎日。思うことは、家族の安否とアメリカに負けた敗戦の原因は理学の力の差であると、若さで一途にそう考えていた。

遅れて9月下旬に帰京、家族一同無事に会えたので翌年4月、東京理科大学に入り初志を貫徹した。

卒業後、日本理化工業の本社研究部に入社。勤務地は銀座松屋の裏で、歌舞伎座も近いので、土曜日の午後などにあの中村吉衛門ほか多くの名優の演技をよく鑑賞できた。またそこで、東京大空襲で九死に一生を得ていた今の妻と知り合ったのも運命であると思う。

原田夫妻

戦後復興の中で、いつも広島が忘れられず、出張の機会なども利用し、かれこれ10回程、原爆記念館など現地を訪問し、ご冥福とその回想に耽（ふけ）ったものである。

その会社の研究部門で定年まで、戦後の半導体時代の中で「半導体用ガスの製造と毒性ガスの安全取扱い」の分野で、戦後の日本復興に寄与し、また母校の講師として24年間、その思いを後輩に伝える機会を得た人生を誇りに思っている。

ここ鎌倉に住んで38年になる。

B29の空襲を体験して

～憲兵は恐ろしかった～

極楽寺若葉会　内田　静江

昭和20年、私は女学校の3年生でした。学校には週一度行き、あと6日間は工場へ学徒動員で行っていました。兄は数え年で20歳でした。18歳の頃から兄は肺を患い、時々たくさんの血を吐いていました。病気がだんだんひどくなって床について起きられない状態でいました。そんな時、憲兵が毎日私の家のまわりをウロウロしたり、のぞき込むようにしていました。私の家の近所の17歳、18歳の若い青年が志願して兵隊になっていくのに、兄は20歳にもなっているのに家にいるので、仮病ではないかと毎日家のまわりを憲兵が見張っていました。あまりしつこいので、ある時母は2階の部屋で寝ている兄を窓際まで引きずり、背中を両手で起こして窓から顔を少し出して、家の前で見張っている憲兵に見せるようにしました。兄はやせ細り、青い顔で憲兵をじっと見ました。憲兵も兄を見ると背中をむけて去っていきました。

それから間もなく、昭和20年8月1日、八王子市は空襲を受け、私たちは焼夷弾の雨の中を逃げて命だけは何とか助かりました。身長175センチの兄は腰が抜けて歩けないので叔父に背負っても らい、身重の母と6歳の私の弟と公園にたどり着きました。B29が上から焼夷弾をバラバラ落とし公園の中にまで落とし、弟は危うく焼夷弾を受けるところでした。すぐ隣を歩いている男の人は大きな敷き布団をかぶっているのに焼夷弾が直接当たり、脇のあたりから血が流れているのを私は見て、体中が冷たくなり動けなくなりました。叔父が「ここは危ないから」と判断し場所を変えて避難しました。だんだん朝が近づくと明るくなりB29も去っていきました。地面に布を敷いて兄を横に寝かせて木の枝を折って見えないようにしました。数時間たつと〝背負（しょ）びく〟を背負った農家の小母さんが通り、びくの中からトマトを私たちに下さいました。そのおいしかったこと、今でも忘れません。叔父がどこからか大八車を借りてきて、兄を乗せて相原へ行こうと私たちを連れてご殿峠をガラガラ家族で車を押しながら叔母の家へ向かいました。途中人が大勢集まってワイワイしているので何かとのぞきに行って驚きました。焼け死んでいる馬の肉をみんなで切りとっているのです。14歳の私は腰が抜けそうでした。

夕方やっと相原の叔母の家へ着きました。それから間もなく終戦。母は男の子を出産しました。兄はそれから病院生活でしたが、月日が過ぎるほどに良くなりました。現在84歳で元気でおります。

憲兵は怖かった。焼夷弾は恐ろしかった。戦争はもうまっぴらごめんです。世界中が戦争の無い平和が続くことを常に願っています。

語り伝えなければならないこと

深沢地区長　日野　三朗

昭和一桁時代生まれの仲間は次々と亡くなっています。幾世紀も続いた封建社会の最後の体験者として、激動の転換期を生き抜いた者として語り継ぎたいことが山ほどあります。

幼い頃の記憶は心に焼き付き決して消えないものです。

山形市郊外の小さな村に生まれて2～3歳の頃、私を子守りしてくれた近所の娘さんが、人買いに売られました。小学校を卒業した年頃と思います。私の兄たち2人は夜になると出て行きました。売られた娘の母親が泣き続ける声を聞きに行くのです。私は小さいので連れて行かれませんでした。そこのおやじさんは酒盛りをしている？　こんなおやじに家の誰も歯が立たないのです。遊郭へ売り飛ばすなど、農村ではおやじの権限で何でもできる封建時代の象徴でした。

小学校から県立工業学校に入学した。戦争まっただなか、多くの先輩が甲種予科練や幹部候補生に志願し出征して行きました。それが1年後には特攻隊として戦死しました。

学校での合同慰霊祭には10人ほどの遺影が全校生徒の前に並んだ。配属将校の「英霊に捧げつつ」の号令で葬送曲がラッパ隊の演奏で響き渡る。

遺影に注視した全校生徒の目から止めどなく涙があふれた。配属将校は訓辞した「この敵を打つのだ」と、特攻予備軍に仕立てられた。

終戦を前にした8月10日、学徒動員で飛行場現場で誘導路建設に従事し、近くの小学校に宿泊していた。突然夏休みの休暇が出た。1週間も久しぶりの帰省だ。その翌日グラマン艦載機の編隊が飛行場を急襲した。宿泊していた校舎など木っ端微塵にやられた。動員学徒150人は助かった。

そして敗戦パニックになった。負けたらどうなるのだ。答えるのは中国戦線から復員した旧軍人たちの言動だった。蛮行の限りをつくした残虐行為がそれだった。男は皆去勢され、女は毛唐に犯される。恐怖のパニックだった。

集団疎開

材木座海楽会　原口　道子

昭和7年生まれの私は6年生で集団疎開に行きました。同年代の友人に聞くと、お寺に疎開したという人もいますし、食糧難の時代に子どもたちにできる限りのことをしてくれて、懐かしいという人もいます。しかし、思い出すのも嫌だ、まずい家畜用といわれたサツマイモとかぼちゃを一生分食べさせられた、芋と南瓜は見たくないという人もいます。一概に集団疎開といっても、様々なのでしょう。

さて、私の体験はと申しますと、昭和19年の8月、栃木県塩谷郡藤原、川治温泉「柏屋ホテル」に行かされました。東武電車に乗り、それから、ぼろバスで、細い道を鬼怒川に沿って奥に入って行くのです。今はあっという間ですが、そのころは本当に山奥でした。

けれど、宿舎はホテルというだけに3階建て、水洗トイレも備わり、一番立派な宿でした。生徒はもっと粗末な宿に割り当てられた学年もありましたので、よかったと単純な頭の私は思ったものです。

子どもらの遠足気分は2、3日で終わり、過酷な日々が待ち構えていました。厳寒の地でも手あぶり火鉢1つ、担任とお気に入りだけが占領。親への手紙、親からの手紙すべて教師が検閲、少しでも本当のことに触れれば握りつぶした上、厳しく叱責されます。人数分の畳数には床の間も入っています。床の間は生徒の私物置き場、いつも、1組の布団に2人で寝る子が出ました。

面会といって親兄弟が訪ねてくるとき、貴重なお菓子や果物を持って来てくれても、総て、担任に預けねばなりません。不思議なことにそれらはほとんど生徒の口に届きませんでした。

水洗便所は凍りついて、うんこはカチカチ、ケルン状態。急場しのぎに、むしろを入り口に垂らしただけの便所が作られました。

正月過ぎて、大半の女子生徒が浴室から「淋病」に感染し急遽帰宅、何の保証も心のケアーもなく空襲激化のなか卒業しました。集団疎開が私たちの修学旅行でした。

広島原爆の思い出

西鎌倉福寿会

大塚　博三（92歳）

戦後60数年過ぎし今も、新聞その他で放射能に関する言い伝えが多いようです。被爆後の約2年半、広島に在住したので感じた体験を述べておきます。

広島在住の方は原爆のことをピカドンと呼称していた。8月6日午前8時20分頃、北方より反転したB29爆撃機が市の中心部に爆弾を投下した。そのウラニウム35の威力は2万トンの爆発力といわれ、全戸数の60パーセントは全壊し、被爆者は人口30万人のうち14万人くらいであったと言われている。特に、黒いものに強く、例えば駅頭の時刻表がくり抜かれた。衣料品のモンペの黒または紺に強く被爆度が高かった。その色は特別に強烈に反応した。

私は8月20日大阪市内の勤務先で本店より広島支店に発令あり驚いたが、命令だったので決意新たに同月30日、食料、寝具、事務用品をリュックにつめ出発した。

同月下旬に広島県を中心にした台風があり、ある意味では放射能が河多い広島だったので海に流れ出たと思われましたが、また反面、山陽本線がズタズタに破壊され復帰困難となり、呉線三原より先は徒歩にて連絡矢野海田市（今の東広島）間も同じ徒歩連絡で、朝早く乗ったデゴイチ（D51）は夕方やっと広島に着いた。

その翌日より事務処理に没頭した。当被爆時の営業店は、金庫から事務品を運び出す時刻で、90パーセントの方が死亡したが、直接外廻りの1人は助かった。しかし、すべての諸帳簿が焼かれ、その後の復帰は並大抵ではなかった。着任後、食料事情が悪かったので土曜・日曜を兼ね郷里岡山まで物資補給に帰った。たまたま復帰軍人の帰郷とぶつかって列車先方の機関車の石炭置き場に飛び乗ったり、死にものぐるいの物資補給のことも強い印象として今も脳裏に残っている。

街の主幹道路の橋が落ちて、代用は河に小舟の連絡が代行していた。また翌年3月、爆心地のお寺で小花が咲いているのを見て、私もこれで大丈夫だと自信をつけたし、駅前に闇市場が段々出店したので食料事情も半年後はいくらか緩和された。

当時被爆地にはその直後より60年間は住めないと新聞などで報ぜられていたが、先行き安堵した。最後に、今後原爆廃止を肝に命じて叫びたい気持ちで一杯です。

私の大正・昭和史（戦前・戦中・戦後）

私の昭和史　終戦時

大蔵みなもとクラブ　加藤　初太郎（88歳）

一般的にはアメリカ軍との戦いの話ですが、私たちは終戦後ですが、アメリカ兵と一緒に中共軍（中国共産党軍）と戦っていたのです。

当時中国は国民党と共産党との革命の内戦中で、中国では終戦にはならなかったのです。当時の日本軍は国民党のために、共産主義化を止めるために戦っていたので、終戦後の日本国への賠償請求を蒋介石は放棄したと言われています。

終戦直後にアメリカ軍の第一海兵隊が進駐して来たのです。ソ連は満州（山海関）まで来ていました。第一海兵隊は南方のタラワ島、マキン島で日本軍と戦ってきた部隊で血のついた日本紙幣を見せてアメリカ兵は自慢していました。将校はサーベルに替えて日本刀を腰に提げていました。アメリカ兵たちは中国に来たのをボヤいていて、本当は東京に行きたかった、東京に行きたいと話していました。

アメリカ兵たちはテント生活なので朝、私たちの部屋に来て自分たちでシェービングをしました。休み時間には野球道具を持って来て、キャッチボールなどして一緒に遊びもしました。私たちがいた場所は中国最東部の駅がある所で、東方はるかに海中より連なる万里の長城がある山海関が見える所でした。

駅長さんは鎌倉小町の警察署の前の金子氷店の人で金子さんと言い、奥さんは戸塚の人で4歳ぐらいのお嬢さんがいました。私たちの任務は主に鉄道線路の警備で、中共軍が線路に地雷を附設するため、毎朝無蓋貨車に砂利、枕木、レール等を積み、地雷を探し取り除くのです。地雷はテレビで見るような物ではなく、重箱よりやや大きめの木箱の中に火薬が詰まった物で、遠くの部落よりサツマ芋畑の中を縄を張り地雷に連なり、列車が来たら縄を引き地雷を爆発させる方式の物で、アメリカ兵は簡単に分解しておりました。

私たちは地雷についての教えはなく、地雷についての知識はありませんでした。

日中は秦皇島の沖の空母より、ヘルキャット（グラマン戦闘機）等がパイロットの顔がわかる程の超低空で警戒飛行をしているので、中共軍は夜間に地雷を附設するのです。この鉄路の重要なのは秦皇島にある陸軍病院の傷兵、病兵を病院列車で無事に復員のために通す事でした。列車で行くと丘のある場所などでは中共軍が攻撃してくるので列車を降りての交戦もありました。

12月中旬には無事に病院列車を通し、私たちも天津のタンクー港より佐世保軍港を経て、昭和20年12月27日に鎌倉に復員して来ました。

弓折れ矢尽きた日本

山崎第二あかね会　加藤　湘三

昭和20年8月15日の暑い昼下がり、太平洋戦争は終わった。

私は昭和19年4月1日に甲種海軍飛行予科練習生として、清水航空隊に入隊後、数カ所を移動して、終戦の日は神奈川県三浦半島の金田湾南端の基地にいた。

課業の途中、分隊長が「天皇直々の重大放送だ、全員集まれ！」と言った。

ミッドウェーに始まり、ガダルカナル、アッツ島、ソロモン群島、マーシャル、ブーゲンビル、硫黄島などを次々と失い、3月には沖縄が壊滅。8月6日には広島に原子爆弾が投下されて、いよいよ本土決戦の日が近づいていた。

駐屯地にしていた小学校で玉音放送を聞いた。

放送が終わると、隊員の中からどよめきが起こった。夢想だにしなかった降伏宣言である。隊員たちは、後頭部を殴打された気持ちだった。

4、5日前から九十九里に米艦隊の接近が知らされ、艦砲射撃の轟音が響き特攻隊の体当たり雷撃が刻々と近づいていた。

我々50名の同期生は、17カ月間鍛えぬかれて、今日か明日かと出撃を待っていた。それが、か細い天皇の勅命により無残にふっとんでしまった。

油壺港にて

戦局は悪化して疲弊しきっているとはいえ尖の玉となった一億の同胞は、死の中に活を求め全員玉砕する日まで絶対に降伏することはあり得ない。これが極限に立った日本人共通の強靱なコンセプトであったはずだ。

8月16日の夜、隊員たちはデッキに集合し、食糧倉庫から酒やウイスキーを持ち出し「やけ酒」を呑むことになった。呑み慣れない少年たちではあったが、食器になみなみと酒を酌み、黙々と胃袋に流し込んだ。ひたすら酔いたかったのだ。

あとがき

「私の大正・昭和史」に貴重な体験をお寄せいただき、戦争、空襲、疎開、家族等々、歴史の事実に向き合って冷静に語ってくださいました。

大正・昭和、特に昭和の時代とは何だっただろうかと、ご自分の体験と深い思いを永い年月、内に秘めて繰り返し反芻、咀しゃくし、その結果、実を結んだのがこの文集だと思います。「戦争や争いほど悲惨で愚かなものはない」そんな切実な思いが行間にあふれています。私たちはこれを重く受けとめていかなければならないと思います。

今回の企画を第1集として、さらに多くの皆さんのお声をお聞かせいただき、この企画を拡げて参りたいと考えております。ご協力をお願いする次第です。

（勢年部）